

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 渡邊日日

渡邊日日氏の論文、『社会の探究としての民族誌 ― ポスト・ソヴィエト社会主義期南シベリアに於ける集団範疇と民族的知識に関する記述と解析』の目的は、南シベリアのブリヤート人の社会範疇と民族的知識を、社会と文化のさまざまな下位システム、政治、経済、言語、宗教、教育等においてとらえ、ポスト社会主義期の混沌と見えるブリヤート人の現実を記述し、それを最終的には現在の世界状況において理解するために、その現実を成立させている要因を解析することである。同氏は、1989/91年の社会主義体制の瓦解に始まるポスト・ソヴィエト社会主義期の、ロシア連邦、ブリヤート共和国、セレンガ郡において、1996年より98年にかけて、計12ヶ月間、モンゴル系民族であるブリヤート人を対象としたフィールドワークを行い、データを収集した。本論文は、そのデータに基づいて書かれた民族誌による分析である。

論文全体は、第1部「ソヴィエト史とソヴィエト『文化』」、第2部「集団範疇と民族的知識の民族誌」から成る。

第1部の第1章「ブリヤーチアの歴史的文脈」では、ブリヤート人の住む土地、ブリヤーチアの歴史的、地理的概況が示され、調査地である3村の現状が描かれる。第2章ではソ連時代に氏族がコルホーズに取って代わられた、という仮説をもとに、各村の成り立ちを記述する。第3章「ソヴィエト『文化』の建設」ではソ連時代に行われたシベリア少数民族に対する文化政策が、彼らの文化に大いなる影響を与えたことが記述される。ことにスターリンの、「社会主義文化」とは何かに関する、「内容においてプロレタリア的、形式において民族的」という有名なテーゼに基づいて、ブリヤート人の文化が「構成」されていたことの指摘がなされる。

第2部の第4章、「集団範疇の諸審級 ― 民族と共同性について」では、ブリヤート人という自意識が、通常、文化的伝統をその淵源と想定されるのとは異なり、ソ連時代の「民族」概念によって強く形作られていることを示す。ここでは、ブリヤート人内部における、東ブリヤート人の西ブリヤート人に対する認識、また、その外部における「モンゴル人」についての見方などが、ソヴ

ィエト的「文化」にその根拠を持つという、意外であるが説得力を持つ分析が行われる。第5章「民族の断片化 ― 言語変種・親族名称・『多』言語状況」では、ブリヤート標準語・ブリヤート語諸変種・ロシア語の三者関係に関する、まことに興味深く重要なデータが提示される。渡邊氏はそれを用い、ブリヤート人はロシア語を少なからず使用しているのではあるが、そうした二つの言葉を使っている言語活動全体を、「自分たちの言語」としてとらえていることを明らかにする。そして、このことが生み出す、ブリヤート人であるということと実際の言語行動とのあいだのジレンマが、彼らの自己認識に大きな影響を与えている様相を的確に描き出す。

第6章「転換する環境に於ける経済と社会」では、文化人類学の先行研究が、コルホーズの民営化を、それを行う人々の民族文化との関係で、理解しようとしてきたことを批判する。民営化の実態は、場当たりの決定と方向無き改革であり、しばしば書類上のみの民営化であったりする。その結果として、民営化は決して人々の暮らしを自由に豊かにしたのではなく、ソ連時代はコルホーズとの補完的關係の中で維持されてきた「私的領域」がむしろ劣化しているのが現状であることを暴いた。第7章「oboo 儀礼とその言説環境」では、ソ連崩壊後、宗教の自由化で、寺院や儀礼が復興されているが、真の変化は、宗教や儀礼そのものではなく、それを取り巻く「言説環境」がソ連の崩壊前後で異なることを示した。また、一方で、宗教的要素を民族的要素と読み換えるソ連時代の言説が、いまでも機能していることも明らかにした。この儀礼に見いだされる集団範疇の多層性がポスト・ソヴィエト期にも継続されていることは、続く第8章「学校教育と民族的知識の社会的循環」のテーマにも関連する。学校での民族に関わる三つの授業、郷土学習、歴史授業、そして、慣習や伝統に関する授業は、生徒たちを、小さな民族誌家とする。こうして学校で集められた知識は、生徒の作文・パネル、新聞記事、準民族誌的な叙述とまとめ上げられ、そして、それらを教師が教材として生徒に教えるという回路で循環する。しかし、教育の現場での民族的知識と、日常的な民族的知識は、必ずしも一致しない。ことに、ブリヤート人の社会カテゴリーの根底を成す、氏族、父系リニージといったレベルにおける相違は、ロシア語使用によるずれとあいまって、現在の彼らの民族的知識にさらなる複雑さをもたらしている。

本論文の学問的功績は次の二つにまとめられる。第一に、ブリヤート人の広範囲な社会・文化現象を調査の対象とし、その中に重要箇所を発見し、そこを

深く調べることで、他に類を見ない厚みのある民族誌を書ききった。そのことによって本論文は、社会主義崩壊前後の社会変動に関する分野におけるこれまでの研究を乗り越え、ここから新たな研究を導く役割を果たしている。第二に、通常の研究のように、社会と文化の諸側面を交差させることで変化する社会・文化の様相を描き、その変化の質と方向を見定めるだけでなく、言語と言説を第三の軸として導入することで、社会の諸分野の相関関係をさらに立体的なものとして理解する手法の先鞭を付けた。

むろん、本論文にも問題点がないとはいえない。審査委員からは、その表現が時として難解であることや、広範な諸領域の論証に、軽重のまだらがあり、全体の統一はいまだ十分とは言えないこと、などが指摘された。

しかしながら、こうした点は、本論文の本来の価値をそこなうものではなく、本論文は文化人類学の研究に対して重要な貢献をなしていると判断された。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文提出者は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。